

仮名草子作者小考(上)

——小亀益英について——

坂 卷 甲 太

仮名草子の一つに数えられている『由来物語(一名『由来名鑑集』)』(寛文九年四月刊)と『女五経(一名『明石物語』)』(延宝三年一月刊)はともに小亀益英の作である。この両書と作者について記してみたい。最初に『由来物語』次いで『女五経』について略記し、最後に小亀益英について述べることにする。

(一)

『由来物語』の諸本には(イ)寛文九年刊本、(ロ)寛文十年刊本、(ハ)延宝四年刊本、(ニ)刊年不明本がある。管見の範囲で

その書誌を記すと次の如くである。

(イ)寛文九年刊本。大本五卷五冊。改装。縦二六・三糎、横一七・九糎。匡郭は四周单边で縦二一・八糎、横一六・四糎。内題「由来明鑑集卷之一(五)」。柱刻「明鑑集卷一(五)……丁付」。行数十三行。絵入。丁数。卷一が目録一丁、本文二十一丁、うち挿絵が八一ウ・二オ〱四ウ・五オ〱八九ウ・十オ〱八ウ〱の四図。卷二が目録一丁、本文十四丁半、うち挿絵が二オ〱三ウ〱六ウ・七オ〱八ウ〱十オ〱十三オ〱の五図。卷三が目録半丁、本文十七丁半、うち挿絵が二オ〱三ウ〱四ウ〱七オ〱八ウ〱九ウ〱八十七ウ〱の六図。卷四が目録半丁、本文二十一丁

半、うち挿絵が△二オ▽△二ウ▽△三オ▽△三ウ▽△四オ▽△五オ▽△五ウ▽△六オ▽△六ウ▽△七オ▽△七ウ▽△八オ▽△八ウ▽△九オ▽△十二オ▽△十五オ▽△二十一オ▽の十七図。巻五が目録半丁、本文二十八丁半（跋三丁を含む）、うち挿絵が△三ウ・四オ▽△六オ▽△八ウ・九オ▽△十一オ▽△十六オ▽△二十オ▽△二十四オ▽の七図。刊記は巻五の末に

寛文九年 小亀氏市工師

巳
西四月吉日

益英作

室町五条二町下ル堺町

小亀三左衛門

四条寺町

前川茂右衛門

（国立国会図書館蔵）

新刊

とある。挿絵の画家は初期の吉田半兵衛である。半兵衛の画風を知る上でも、また挿絵史研究の上でも重要な手がかりになると思われる。

(ロ)寛文十年刊本。寛文九年版と同板で、大本五卷五冊。

題簽、短冊型子持枠で表紙左肩に「和漢（和漢） 由来物語一」（三）

（四）とあり、巻五巻末の跋文を省き

寛文十庚辰年二月吉日開板
と刊記を付している。あとは目録、本文、挿絵とも寛文九年版に同じい。

（横山重氏蔵）

(ハ)延宝四年刊本、(ニ)刊年不明本はともに原本未見である。本書について当時の書籍目録を検するにそれぞれ次の如く記載されている。

『寛文十年書籍目録』に

冊五 由来物語 物の初りを記す
小亀益英

『元禄五年広益書籍目録』に

五 由来物語 小亀氏作

『天和元年新增書籍目録』に

五 由来物語 小亀 四尺

寛文九年版の刊記といい、書籍目録の記載といい、本書が小亀益英の筆になったものであることは明白である。本書は題名の示すように事物の由来と起源について述べたものである。同種の仮名草子に『宜応文物語』（寛永中刊？）や『枯杭集』（寛文八年刊）がある。『宜応文物語』は「志学の事」「胎止月之沙汰」「止日之事」「種子善悪之事」「利根鈍根之事」「短命長命之事」「相好好醜之事」「二子生事」

「鬼子生事」「瘡生之事」「盲目生事」「わきかの病の事」「小児病の事」等、仏教的輪廻觀を基盤として、二十五項目に涉つて人間の容姿や生命現象さらに疾病の事などを通俗的に記したものである。一種の医学的知識を与える目的のもとに書かれたものといえる。『枯杭集』は、序文に「和哥の道をまなばん人へ、物事にその出生をよく知べし。さもあらぬ人のよめる歌は不実にしてあやしくこそとなんいへり」とあるように、歌を詠む際に必要な素材——主として器物——の名称、出典、形状、用途等について記したもので、これによって和歌をたしなもうとする初心の人に基礎的知識を与えるという目的のもとに編まれたものである。箏、琴、琵琶、笛、囲碁、雙六、書画、筆、硯、鏝、扇、屏風、相撲、櫛、酒、茶等々、全六巻に九十九項目をあげて解説している。のちの『嬉遊笑覧』や『守貞漫稿』の如き一種の辞典的性格をもつたものといえる。

これらはいずれも庶民教化を目的とした啓蒙的知識的なもので、仮名草子を形成する一つの性格である教訓性、啓蒙性、実用性という面を最も極端に且つ露骨に表明したものである。それだけに文学的色彩には極めて乏しい。これらは当時夥しく刊行された歴史、地理、兵術、曆占、算

書、医学、作法、立花、料理等に関する純実用的な通俗解説書と軌を一にするが、これらの集積によって庶民教化が着々となしとげられたのであつて、その意味においては重要な意義をもつものであるといえる。

『由来物語』の内容は

第一 天地方角初り沙汰の事

第二 月日初り、昼夜初り沙汰の事

第三 山川草木初り并風雨雷電初り沙汰の事

第四 人間初り、夫婦初り沙汰の事

第五 毎月異名本説由来并五節供由来の事

等々、巻一に十二項、巻二に六項、巻三に四項、巻四に六項、巻五に五項、計三十三項を挙げてそれぞれの由来を述べている。本書に挿絵が多いのは図入解説ともいふべきその性質によると思われる。

本書の出典について頼原退蔵博士は『日本文学書目解説(上方・江戸時代上)』(岩波講座『日本文学』)に於いて「すべて漢籍のみを引用して、殆ど和書をあげるものがない。纔かに卷三連歌誹諧之沙汰の事や卷四白拍子並傾城初りの事の一部等に、我が国に關した事が見えるだけである。これは本書が事物紀原、事文類聚等に直接よつてゐるからで

あらう。」とされている。『事物紀元』『新編古今事文類聚』は和刻本があるが、ともに大部冊のものであり、これらを典拠とした作者小亀益英の博引旁証ぶりには驚かざるを得ない。

(二)

『女五経』の諸本には延宝三年刊本と延宝九年刊本及び元文六年刊本がある。延宝三年刊本は原本未見であるが、朝倉治彦氏の調査によると刊記は次の如くであると云う。

旨 寛文十一之

小亀氏市工師益英作之

延宝参歳仲冬吉辰

西村市郎右衛門刊之

(京都大学図書館蔵)

延宝九年版には奥付を異にする数本が存するようである。管見の範囲でその書誌を記すと次の如くである。

(i) 松會版。大本五卷五冊。改装。縦二五・四纏、横一八・三纏。匡郭は四周単辺で縦二二・三纏、横一五・八纏。内題「女五経第一(二)春あかし物語」「女五経第三(四)詩経上(下)」「女五経第五禮記全」。柱刻「女五経巻之一」

(五)……丁付。行数十三行。絵入。丁数。巻一が目録

一丁、本文十五丁半、うち挿絵が八一ウ・二オ∨八四オ∨八八オ∨八十一ウ・十二オ∨八十五オ∨の五図。巻二が目録一丁、本文十六丁、うち挿絵が八三オ∨八六ウ・七オ∨八十一オ∨八十五オ∨の四図。巻三が目録一丁、本文二十七丁、うち挿絵が八二ウ・三オ∨八七オ∨八十一オ∨八十六オ∨八十九オ∨八十二オ∨八二十四ウ・二十五オ∨の七図。巻四が目録一丁、本文十八丁、うち挿絵が八三ウ・四オ∨八八オ∨八十一オ∨八十五ウ・十六オ∨の四図。巻五が目録一丁、本文十七丁、うち挿絵が八三ウ・四オ∨八八オ∨八十オ∨八十三オ∨八十五ウ・十六オ∨の五図。刊記は巻五の末に

延宝九稔西九月上澁日

松會三四郎新版

(国立国会図書館蔵)

とある。この奥付を子細にみると、刊年月の「延宝九稔西九月上澁日」と云う字体と書肆名「松會三四郎」の字体は明らかに違っており、入木した形跡があるし、墨付きの工合も悪い。後印本と思われる。

(ii) 梅村版。松會版とすべて同じだが奥付を左の如くす

る。

延宝九稔西九月上澁日

梅村弥右衛門

(東大霞亭文庫蔵)

梅村版も版面の工合からして後印本のようである。

(イ)書肆名なき版。刊年月をそのまま残し、書肆名を削つて

延宝九稔西九月上澁日

新板

(早大図書館蔵)

としている。もちろん後印本である。元文六年刊本は原本未見である。本書について

『天和元年新增書籍目録』に

五 女五経 小亀氏 四匁

『元禄五年広益書籍目録』に

五 女五経 小亀氏作

『元禄九年増益書籍目録』に

西村市 女五経

三匁二分

とある。延宝三年版の版元である西村市郎右衛門は京都六角通西洞院西入に居を構えた書肆兼作家である。梅村版の

梅村弥右衛門は玉池堂或いは甘節堂と号し、京都寺町通松原上ルに居住した書肆であった。また、松會三四郎は周知の如く江戸の、しかも幕府の御用書肆であった。西村版、梅村版、書肆名なき版は京都で刊行され、それを後に江戸の松會が求板したのであろう。

一名『明石物語』とも呼ばれる本書は、『源氏物語』の「明石の巻」を翻案改作し、それに明石の姫が賢女の物語をするという趣向で、女性に対する教訓を付加し、いわゆる「女訓物」としての体裁を整えている。さすが仮名草子後期の女訓物だけに、初期の『女訓抄』などにみられる生硬露骨な教訓性は次第に排され、物語性が強く要求されるようになったのであろう。本書にもそのような要求に応えようとする努力の跡がみられるのであるが、却ってそこに構想上の破綻を来たしているようにも見える。本書の数年後に刊行された『名女情比』（延宝九年刊）が史上艷名をうたわれた女性の列伝と近代の名妓列伝であるなど、この期の女性教訓書が次第に変貌を余儀なくされている状態が本書にもうかがわれるのである。本書の巻一・巻二は「明石の巻」を翻案改作して当世風に描き、巻三・巻四は唐土の賢女貞婦の逸話を述べ、巻五はおよそ女性として守るべ

き礼儀作法および心得を説いている。

以上『由来物語』と『女五経』について簡略に記した。

多種多様な内容とスタイルをもつ仮名草子群の中にあつて『由来物語』などにみられる「啓蒙的実用的」なもの、『女五経』などにみられる「女訓物」はそれぞれ系列を立てることが出来る。啓蒙的実用的な系譜における『由来物語』の占める位置と内容の精査及び女訓物の系譜における『女五経』の占める位置と内容の精査については別の機会に発表することにする。

(三)

『由来物語』と『女五経』の作者である小亀益英については頼原博士は『日本文学書目解説(五)、上方・江戸時代上』(岩波講座『日本文学』昭和七年)の『由来物語』の項において(作者は「連歌誹諧之沙汰の事」の条で、益次といふ人である事だけ知られる。)とされ、さらに同書巻末の訂補で

○由来物語 一本巻末に

小亀氏市工師益英作

時寛文九年⁽¹⁷⁶⁹⁾己酉四月吉日

室町五条二町下ル堺町 小亀三左衛門益英

四条寺町

前川茂右衛門

新刊

とある。即ち寛文九年刊本が初版で、作者益英が小亀氏といふ割鬨氏であつた事も知られる。

とされた。そこで頼原博士の提示を出発点として小亀益英について考察していくことにする。

1 作者益次説の検討

頼原博士は前記『書目解説』の本文において作者を「益次」とし、訂補において「作者益英」と記されたが、その関係については言及しておられない。この点の検討から始めることにする。『由来物語』卷之三、「第四、連歌誹諧之沙汰の事」の冒頭を引用すると次の如くである。

「むかしより哥書を見侍るに。れん哥^がはいかいの哥有、今又れんがはいかいハ。なおすなるを、万葉集第八、尼かよめる。さを川の水をせきとめてかへす田をはつもとゆいといへるより。連哥^{れんか}ハはじまれりと。八雲御抄にも侍る。まことにちからおもいれずして。人の心、我心をやしない。おにあざみ、たけきおゝかみ

も。やわらぐるも皆これれんがはいかいのとくならず
や。やつかれも初年のとしより誹諧をすき候へども
皆々みな（10ウ）いふべき事前後になり。蚊虻もんもうせんぼん
なるわが身にて侍りければ。中々やわらかなるこけ
のむしろを。しきしまの道みちハすなをならずして。ゆが
みぬげければ、とがなき人をうらみ。口をひきさ
け、心をもやし。あさまがたけのけぶりをまなべハ。
いよ／＼ぜんごけつくわして。はらふくるゝわざにな
ん侍れ。されどもいわでたゞにやミぬべき事ならね
ば。古句ぬげがらおもかまわず。少々せうせうつかまつりけ
るを。今こゝにかき出し侍る。

○発句

天と地と人や盤古ばんこの君がはる

益次

として「益次」の句を続けて十四句記す。そしてその後
うしの年につかふまつる

小亀市工師

神農しんのうかのどけきうしの年頭としがしら

益英

として「益英」の句を十六句あげる。そしてこの後は「益
次」と「益英」の句を数句おきに記して「連哥誹諧之沙汰
の事」の条を終るのである。額原博士は冒頭の「少々」

つかまつりけるを。今こゝにかき出し侍る」という文脈か
ら「益次」を『由来物語』の作者とされたのであろう。し
かし、「連哥誹諧之沙汰の事」の条全体をみる限り、「益次」
と「益英」とは別人であることは明らかである。私は益次
なる人物は益英の肉親か或いは師に当たる人ではなかつた
かと推定するのであるが、その関係は詳らかでない。とも
あれ、右の文中に「やつかれも初年のとしより誹諧をすき
候へども」とあることから、益英が若年のころから誹諧を
たしなんでいたことは明らかである。そこで、俳人として
の小亀益英の足跡をさぐってみることにする。

小亀益英が著作をし、誹諧をたしなんだ時期は貞門誹諧
の時代であった。そこで貞門の句集をいくつか検討したとこ
ろ、北村季吟編『続山井』（寛文七年刊）に両人の句が載
っているのに気付いた。すなわち同書の「春之発句 中」
の「梅」に

平野へかけ侍る絵馬えまに
八姓はちじやうの神木かみきならし八重の梅

益英

「秋之発句 上」の「八月十五夜」に

天のくらす常よりや猶けふの月

益英

同じく「秋之発句 上」の「点取興行」に

日のやうにてるは月夜の鳥哉

益英

「冬之発句 上」の「雪」に

あは雪のふれば四国も五こく哉

益英

と益英の四句が載るが、うち「八姓の……」と「天のくらさ……」と「日のやうに……」の三句は『由来物語』に次の如くある。

八姓の神木ならし八重の梅

益英

右ハ平野へゑんまかけ侍るに仕る、神社考にいわく、

平野ハ八姓の神なり、神木ハ八重のむめなり(13ウ)

日のごとく照ハ月夜のからす哉

益英

天の玄さつねよりやなをけふの月

益英

易に天ハ玄也、天明らかなるときハ日月くらし、右ハ名月ことやうさへ侍ればつかまつる(ともに16才) 次に益次の句は「秋之発句 上」の「十四夜」に

あすよまん歌をはらむやこもち月

益次

「冬之発句 中」の「霰」に

うちみるや小春は空に玉霰

益次

の二句が載っている。以上のことから、『続山井』に記す「益英」と『由来物語』の作者小亀益英とは同一人物であり、さらに益次と益英が別人であることが明らかになつ

た。そして兩人とも貞門の俳人であったのであろう。残る問題は益英と益次とがいかなる関係にあったのか、彼らが貞門においていかなる位置を占めていたのかということである。貞門諸派のいづれに属し、その師は誰であったのか。貞徳歿後の貞門の状況を考えた時、益英をめぐる師弟関係はかなり絞ることが出来ると思うのであるが、このことについては先学諸賢の御教示を得たいと思う。

2 割腕氏説の検討

額原博士が小亀益英を割腕氏すなわち刻工(板木彫刻師)とされたのは、前記の如く寛文九年版『由来物語』の刊記に「小亀氏市工師益英」とあることからと推察される。「市工師」||「梓工師」とでも類推されたのではないだろうか。しかし、「市工」あるいは「市工師」が刻工を意味するといふ用語例を現在の私は持ち得ていない。小亀益英がもしも刻工であったとするならば、ある一つの問題を解く重要な鍵になるのではあるまいか。というのは日本の近世文学は、いな近世文化は出版事業の背景なくしては考えられない。それほど出版事業は大きな役割を果たし、文化の興隆に貢献していたのである。その出版事業を支えたのは、い

うまでもなく作者、書肆、画工、版下書工、刻工、摺師等であつた。われわれは近世文化の実体を究めるためには出版事業について多く知らねばならないし、そのためには出版に關与した人々のどれをも疎かに出来ないであらう。しかしながら出版文化の構造の究明が非常に重要であるにも拘わらず、われわれはそれを明らかにし得ない。作者、書肆、画工については比較的知り得るが、刻工、摺師等の、末端に連なつた人々については、知るべき資料をほとんど持たないのが現状だからである。その埋没しつゝある刻師について造詣が深く、貴重な資料を報告されてゐる丸山季夫氏に益英刻工説について伺つてみた。丸山氏の御意見によると、市工師が刻工を意味するという用語例はなく、これだけで断定するのは危険であらうということであつた。このようなことから、額原博士のとられた割鬮氏説はやや早計だとも思われる。しかし、「連哥誹諧之沙汰の事」の条と刊記の二カ所および益英の他の著作のいくつかにことさら「小亀氏市工師」と明記したのはそれなりの理由があつてのことであらう。「市工師」の眞の意味を解明しなければならぬが、これは今後の課題であらう。ただ小亀益英がいわゆる「士農工商」のうちの「工」に属するな

かに携わつていたことは確かなように思われる、そしてそれが、「版」に關係したものではなかつたらうか。

3 小亀益英の他の著作

これまで小亀益英の著作した仮名草子『由来物語』と『女五経』を中心にみて来た。ところがこの二書と俳諧のほかに益英には多数の著作があつたことは当時の書籍目録によつて明らかである。すなわち

『寛文十年書籍目録』に

一冊 韻鏡秘事 小亀氏益英

一冊 韻鏡診解 小亀氏

『元禄五年広益書籍目録』に

五 因果経抄平かな 小亀氏作

六 大学診解 小亀益英作

六 中庸診解 小亀益英作

一 韻鏡秘事 小亀氏益英作

一 同秘事大全 同作

四 同秘事診解 同作

六 同秘事診解大成 小亀氏

二 同相伝書 同作

煩雑になるので他の書目については省略するが、記すところはほぼ同じである。ざっとみて四声七音の書である「韻鏡」に関する著作が多いが、その他仏典の解説、『大学』『中庸』の俗解もある。当時としてはかなりの量の著作といわなければならない。『国書総目録』によると、右の著作のうち『因果経抄平かな』『韻鏡相伝書』『韻鏡秘事諺解』『同大成』『大学諺解』『中庸諺解』については所在を記さないが、他は現存しその所在を知ることが出来る。

ともあれ、小亀益英が貞門派の俳人として、仮名草子作者として、あるいは民間学者として当時の人々や書林関係者に知られた文人であったことだけは確かなことである。そして、「韻鏡」については門外漢なのでよくわからぬが、これらの著作から推して小亀益英が相当高度な且つ正統的な教養を有した人物であったと推察するのである。

4 小亀益英書肆説の検討

寛文九年版『由来物語』の刊記に示すように、益英は版元の一人であった。相版元の「前川茂右衛門」は浅井了意の『堪忍記』寛文四年版などを刊行した書肆であった。これと名を連ねていることから書肆説も取り得るし、あるいは

は著作者としての版權所有を連名の形で出したとも取り得る。もし書肆であったとするならば、他にどのような書籍を刊行していたのであろうか。『慶長以来書賈集覽』は当時の書肆を網羅したものではなく、必ずしもわれわれを満足させるものではないが、これには小亀益英の名はない。また不思議なのは寛文十年版の『由来物語』である。わずか一年後に刊行された再版本の刊記には小亀益英の名も前川茂右衛門の名も削って書肆名を刻していないことである。この間にいかなる事情があったのかは全く見当がつかない。ただ考えられるのは次の事である。延宝九年版の『女五経』に奥付を異にする教本が存したように、寛文十年版の『由来物語』にも奥付を異にする版があるのではないかと推察される。私が寓目したのはそのうちの書肆名を削った一本であったのかも知れない。このことについてはなお調査を続けたい。

仮名草子のほかに多数ある益英の著作がどのような形で刊行されたのであろうか。そのすべてについて調査することは出来なかつたが、実見したものについて記しておきたい。『韻鏡秘事抄』と『韻鏡秘事大全』の合一冊本の『秘事抄』の目録のあとに

寛文九巳酉歳

小亀氏市工師

九月吉日

益英作

とあり、『秘事大全』の巻末に

寛文九年菊月吉日

益英述之

室町 小亀三左衛門板行

韻鏡秘事大全終

(国会図書館亀田文庫)

とある。また、『韻鏡諺解』の巻末に

韻鏡之書四十三転而導之者在

序例矣故今加和点於序例以寿

梓而已

旨 寛文十年七月吉日

小亀三左衛門開板

(国会図書館亀田文庫)

とある。以上の如く、その著作のいくつかを益英が刊行しているのである。「韻鏡」に関する著作などは当時においても特殊なものであったろうから自費出版ということも考えられるので、このことからただちに益英が書肆であったとは断定出来ないにしても、出版に相当深く関与していた

ことは否めないことであろう。これまでみて来たように、刻工説にしろ、書肆説にしろ今一つはっきりしない点がある。それ以外にも不明の点が多いのであるが、小亀益英という人物についてかなり明らかになったと思う。

益英は貞門派の俳人であり、仮名草子作者であり、民間学者であった。彼が己れの名に冠した「市工師」という名称が真に何を意味するのは今のところ解明出来ないが、いわゆる「工」に関連した何かに携わっていたらしいこと。書肆とは断定出来ないまでも出版に深く関与していたらしいこと等々。益英を調査しているうちに私は当時の文人の姿をさまざまに思い描いた。その彩りのある多様な生活。その多様さは浅井了意にも、山岡元隣にも、その他仮名草子作者の多くに共通していえることではないだろうか。このことから、この期の文人の多彩な生活の実態を垣間みる思いがするのである。

5 小亀益英の略歴

国文学界では小亀益英は余り知られた存在ではなかったようであるが、国語学方面、漢学方面では或る程度知られた人物であったようである。仮名草子の面からばかりみて

いたので迂遠な方法でたどりついたのであるが、このことから研究調査に於いて各分野の総合的研究体制の必要を痛感した。基礎的な資料の中に小亀益英が著録されていたのである。『日本人名辞典』『大日本人名辞書』『新撰大人名辞典』『漢学者伝記及著述集覽』『近世漢学者傳記大事典』等である。いずれも履歴は簡略であるが、そのうちで比較的詳しいと思われる『漢学者伝記及著述集覽』から小亀益英の略歴を再録してみる。

小亀勤齋こがみきんさい

名 益英。字 叔華。号 勤齋。生地 京都。京都の

儒者。

著書

韻鏡九算くわんきやう指南二卷。韻鏡秘事二卷。韻鏡秘事大全三卷。韻鏡秘事諺解四卷。韻鏡秘事諺解大全六卷。韻鏡相伝書二卷。改正半切字彙訓付十四卷。周易蓄秘事六卷。小学諺解十卷。正字韻鏡二卷。大学諺解六卷。由来物語三卷。

著作の巻数等に誤りがあるようであるが、これによって小亀益英の輪郭がさらに明らかになった。そして、今後の調査の手がかりも得た。益英の生涯をくわしくたどることによって、これまでに提示した疑問点が解決するのではないかと思う。また、小亀益英の人物像から仮名草子作者群の実態も或る程度わかるのではないだろうか。この小稿はもちろん中間報告である。先学諸賢の御教示を得て、小亀益英の足跡をさらにくわしくさぐって行きたい。

〔註〕

(1) 丸山季夫氏は「刻師名」と題する貴重な調査報告を『さすら』誌に連載しておられる。

*

本稿をまとめるに当たって横山重氏、矢島玄亮氏、朝倉治彦氏からさまざまな御教示を賜わった。執筆後、山田俊雄教授から貴重な御教示をいただいた。続稿の中でまとめたいと思う。